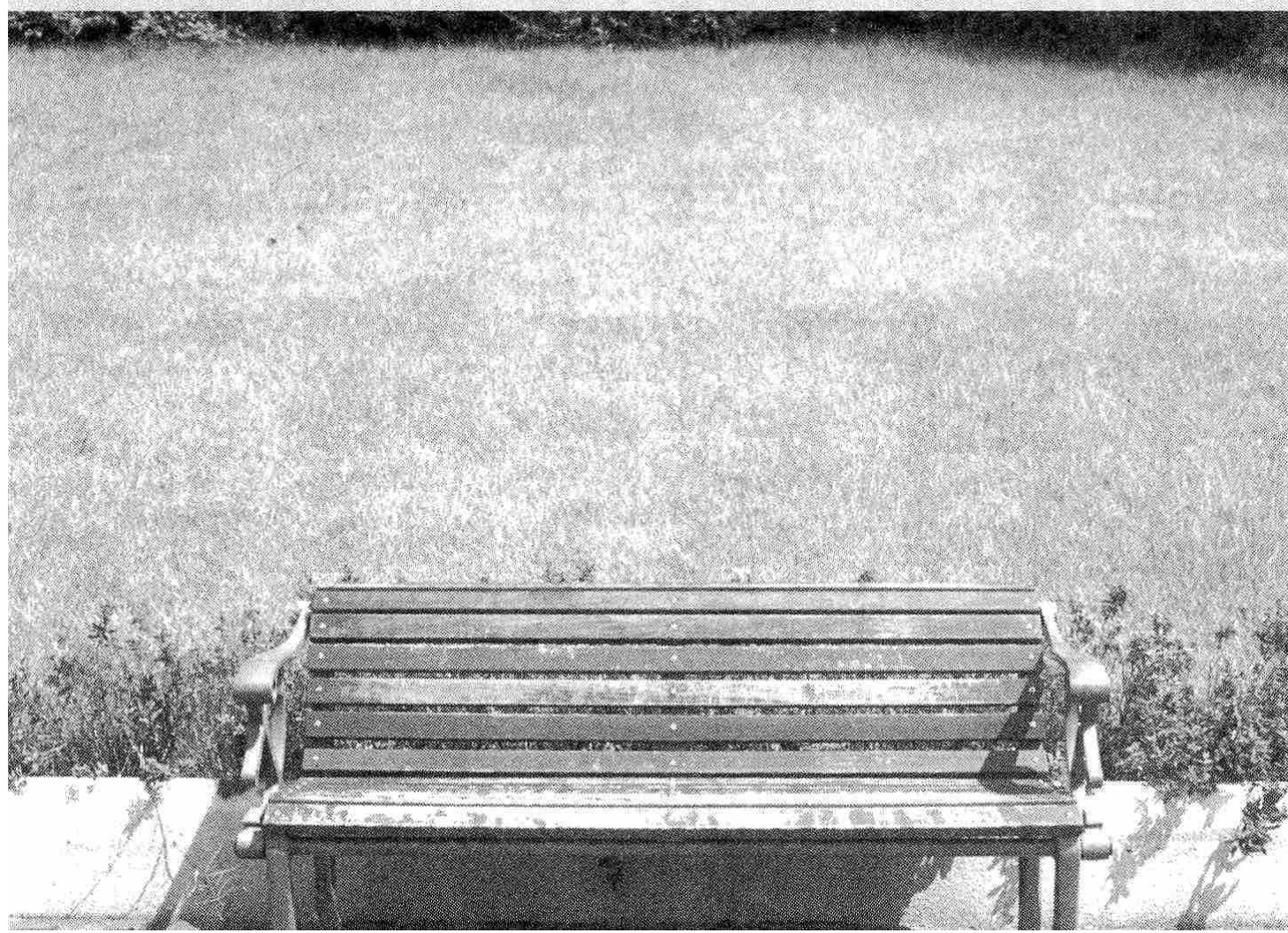


3章 子育ての論点



1 好きなことを自由に学ぶ

でも、苦手なことも楽しんで学ぶ

◆基礎学力がないと……

フリースクール、自分作りスクールなど、現在、この学園のように一般的な学校とは異なる運営方式を持つ学校が全国各地にたくさんできてきている。こうした学校に共通しているのは、従来の学校の枠わくでは対応しきれない子供が集まっていることだろう。

また学びを自由に選び取る選択肢の幅が、制度に縛しばられた従来の学校よりも相対的に広いことだ。だからそこで、決められた授業を設もうけず、子供達にやりたいことをさせていれば彼らは活き活きするのもかもしれない。が、「でも」なのである。

学園を始めてから四年が経たつが、設立当初から変わらぬ思いがある。試験が終わった後は、全部忘れてしまうような勉強ならさせたくない。何に役立つかわからない授業はしたくない。教育は「考えるための道具箱」なのだから、その道具の使い方、利用の仕方、工夫の仕方を学ばせたいとずっと願ってきた。

こうした間、何時も感じていたことは、基礎学力の大切さだ。彼らには小学、中学校で学ぶはずの基礎学力をつける必要性があった。基礎学力とは道具箱の中の道具。道具箱の中に基礎学力という道具が入っていないくは、まず道具の使い方を教えようにも教えられない。

簡単に言うなら、「自由に学ぶ」という名目のもとに、「好きなことだけを学ぶ」という選択をした時点で、一生算数や計算が苦手になったり、辞書の引き方を知らない不便な生活強いられるかもしれない。自由に学ぶことを選びとる子供達は、一見、利益を得ているように見えるが、実は将来に対し可能性の幅を狭め、決定的な損失をってしまうのではないだろうか。

本来、しっかりした基礎力が入っていればいるほど、本人の自由度は高まるのだ。

基礎学力がないとたとえ面白く学べるチャンスがあっても、このチャンスをつかめないし、面白さにも気付かず素通りすることになりかねない。また社会には、「学習や訓練によって知識や技術を身につけた者が、人生を有利に、また自由に生きられる」という合理性も厳然としてある。

◆嫌いなことをしてはじめて好きなことも分かる

私達、子供を取り巻く大人は、子供がはじめから何か好きなこと、やりたいことを選び学びとれる、という幻想を過度に抱いてはいけないと思う。

好きなことを選択するためには、嫌いなこともいろいろ経験してみなければならぬ。こうした経験を通してはじめて、何が好きなのか分かりはじめるのだと思う。

そのために、何でもまずやってみることが大切だ。何もまったく体験をせず、「嫌そうに見えるから!」とやらなかったら、それは単なる「食わず嫌い」と同じになってしまう。

トラウマ（精神的外傷）になるほど無理にやらせてはいけないが、それでも「はじめの一步」を踏み出す勇氣は必要だろう。むしろ、ここでは大人達が子供にきつかけを与え、子供達を踏み出させる勇氣を持つべきだ。どこかに動機付けを見出だせば、子供達は必ずやりはじめるのだから。

誰でも自分の好きなことや、やりたいことだけをして生活ができたなら、こんな幸せはないと思う。しかし、あたかも毎日がクリスマスのように贅沢な食事やプレゼントが氾濫している時代、一体どれだけの多くの人が、胸をわくわくさせて何かを待つというような楽しみを感じているだろうか。

特に人から注目をひくような劇場型の犯罪をおこした子供が発する、「何か刺激が欲しかったから」「生きている実感が欲しかった!」というコメントを聞くと、思える。

子供達が好きなことを自由にできる学校が必要なのではない。何かを伝えたいという思いを持った先生達がそこにいること、そして自由に子供達に伝えたいメッセージを伝えられる学校が必要なのだ。

自由を謳歌おうかするためには、自分で自分を律りっする力が前提として求められる。選択をした時点で発生する責任や義務がある。これらをしっかりと教えていかなければ、今や社会現象になっている「不登校」や「引きこもり」が増えつづけると思うのだが……。

皆で是非、アイディアを出し合い、考え、そして伝えたい。はじめは乗り気がしないことや嫌いでも必要なことをどうやって楽しくするのかを。嫌いやなことも、見方を変えたり、方法を変えたりすれば、まるで違ったように見えてくることを。

甘さがたりないときには、チョットとお塩を振り掛けることで、甘味が増したように感じられるのと同じように、ちょっと厳しいアドバイスを送ることで、子供の人生に深みが増すのではないだろうか。そして、単に苦手や嫌いという理由で逃げてばかりいると、自分の生きる世界が狭せまくなり、つまらなくなることを、私達大人は伝えていかなければならない。

2 本当の意味の「ゆとり教育」って？

◆耳に心地よい言葉のビタミン剤

現代という時代が^{かわ}渴き、^{さつぱつ}殺伐としているせい、言葉の「ビタミン剤」として耳に^{こころよ}快い言葉を無意識に欲しがる人が多い。

そんな中、ゆとりのある生活で、ゆとりのある教育をして、ゆとりのある子供に育てよう！ と、何でも「ゆとり」という言葉をくっ付けていた時期がある。これは聞く者の耳に心地いい代表的な言葉のビタミン剤の一つだと思う。

しかし、確かに耳にやさしいのだが、肝心の「ゆとり」という言葉の使い方が^{くうきよ}空虚に^{ひび}響くのはなぜだろうか。

私は「ゆとり」という言葉を聞きたびに、「えっ、違うんじゃないか」と、「ゆとり」を連呼している方々に質問したくなる。特に、教育現場で使用される「ゆとり」という言葉の使われ方が違うのではないかと常々思ってきた。

「ゆとりのある生活で、ゆとりのある教育をして、ゆとりのある人間に育てる」という主張は、誰もが考える正論ではある。しかし、かけ声ばかりで肝心の「ゆとり」教育のビジョンが見えてはこない。また、現実世界の事態はゆとりの本質からかなりかけ離れているように思える。

例えば、ローンに支えられた生活の中で何でも買い与え、ゆとり教育という名目で減っていく授業時間を、受験に間に合うように補おうとして、生徒の理解度に関係なくフルスピードで駆け抜けていく現実の授業……。

また、「ゆとりのある人間に育てよう」というかけ声は、人間としての規律や責任をとらず、自由や権利のみを与えた放埒な「勝手人間」を育てようとしているように映るのだが、これは私の目の錯覚だろうか。

◆「素敵な生き様」が子供にパワーを与える

「こちらの学園はいいですね。何しろ先生が二〇名。生徒が少数。本当に理想の『ゆとり教育』をしているんですね」と、現役の中学校の先生が羨ましそうに語った。言葉が続けて、「私もそんな学校でのんびり教えてみたいです。きっと教壇に立つのが『楽』でしょうね。先生の公募をなさるときは是非、お声をかけて下さい。三〇年近く教壇に立っており



ますのできつとお役に立つと思います」。

この学園は社会でいうゆとり教育をしたくて生徒が少数で先生二〇名なのではない。早い話、単に生徒がいらないだけなのだ。しかし生徒が一人だろうが一〇〇人だろうがやりたい教育をやることに変わりはない。

生徒数が少ないのは困りものだが、もっと頭を悩ますのは教師、すなわち人を教えられるだけの理想的な「人材」の確保である。

「教育は考えるための道具箱」と位置付けている私にとって、その道具箱の道具を自由自在に使えて、そのうえ生き様さぶさまの素敵な先生を探したい。理想教育をしようとして創った学校だから、学生の人数に関係なくその理想を「実践」するのは当たり前だが、求めている教師とどうやって会えるかと、ずっと頭を痛めていた。

そして気が付いた。「普通の学校の先生は学園の教師にはお願いしない」と決めているのだから、周りを納得させるほど「素敵な生きざまをしている人を先にさがせばいい」と。

子供は決して天使ではない。むしろ小悪魔だ。だから大人に対して容赦ようしやしない。学歴や経歴といったものよりも内面を見抜き、厳しくジャッジする。だから、教師経験のあるなしは基準にしなかった。子供に真摯しんしに向き合える姿勢や資質を持っているかどうか、教える科目や事柄に対して本人がどれだけ情熱や憧れを持ち、それを相手に伝えられるかどうかどう

かを基準にした。

◆生徒の人数とゆとりの関係

そんな思いで、自分の回りをぐるっと見回し、今まで「おもしろい！」と思ってお付き合いしていた方の中に素敵な先生になれそうな人材が沢山いた。彼らを口説いて、口説いて、口説きまわって、ありがたいことに理想とする良い先生や良い先生候補者達が揃った結果、先生が二〇名プラス先生候補者数名という、先生の方が多い学校になったただけだ。

生徒数が多い方がそれは断然^{だんぜん}いい。色々な問題が起こるのはむしろ楽しい。子供間の人間関係も複雑になり、その中から子供同士が刺激を受け、学び合える。

人数が少なすぎると、逆に目が行き届きすぎてしまう。すると生徒が工夫したり、努力する前に答えが与えられてしまうような現在の「親子」と同じような関係が、学校の中でも起こってしまう。皮肉なことに、学校でも家庭でも、ゆとりのある人数とゆとりのある時間が、自分で考えたり、自分で行動してみる必要のない子供ばかりを育ててしまう結果になっている。このように、ゆとりは使い方を間違えるとむしろ良くない逆の結果を生む。

齋藤孝さんも『子どもに伝えたいへ三つの力』の中で次のように言っている。

「かつて親が一人ひとりの子どもの行動を細かく見る余裕がなかった時代には、子どもは

いわば親の視線から逃れた闇の世界に生きる時間を多く持つことができた。また日本の戦後社会のように、親が子どもの面倒を見る余裕がない時代には、子ども同士の世界は独立して存在しやすかった。ところが、現代では子どもの数が減少した結果、親の視線が子供に届くようになってしまった」

少子化と経済的なゆとりが生みだした子供達の危機が指摘されている。この問題は、村上龍氏と陰山英男氏との各対談でも話し合ったので、その部分も読んでいただきたい。

◆ゆとりは教師のために

つくづく人間は愚かだ、と思う。時間が余ると何にでも口出ししたくなり、何にでも手を出したくなる傾向がある。

手を出したり、口を出したりしているうちはいいが、そのうち段々と親と子、先生と生徒の間の「距離のとり方」を崩くずしていき、知らず知らず親は奴隷どれいのように子供に仕え、先生は生徒のマネージャーのように、受験から逆算してつくられた時間の管理に奔走ほんそうするようになっていく。こうした現実を踏まえると、むしろ「ゆとりがない」ほうが、工夫する隙間すきまがあり、自分の「頭を使う」必然性ひつぜんせいが出てきて、結果、いい子供に育つように思えるのだが、違ちがうだろうか。

私は「ゆとり教育」という場合、決して授業時間を減らしたり、休日を増やしたりして、子供達に単に時間的な「ゆとり」を持たせるのが目的ではないと考えている。誤解を恐れずに言うなら、むしろ「ゆとり教育」とは、第一に先生のためであり、先生の意識に関係していると思う。

今の先生は仕事に追われて大変だという。朝早くから夜遅くまで、子供達の問題、授業の準備、その他の雑用におわれて、「気持ちのゆとり」どころの話ではないらしい。「気持ちのゆとり」がないと、じっくり考える時間もない。生徒の問題を解決することも、勉強を教えることも楽しめない。仕事を楽しめない人間に、いい仕事ができるとは思えない。

つまり、ゆとり教育とは、子供が社会人として一人で骨太に生きていけるようになるために、「考えるための道具箱」の道具の使い方を教えないといけない先生が有効に使うべき時間であり、決して生徒に「暇」な時間を与えることではない。そこで、ゆとりをもらった先生はどうやって自分の気持ちにゆとりを持ち、それをどうやって授業に反映させ、ゆとりのある教育ができているのかが問われていくべきだ。

◆本当の「ゆとり教育」のもたらす効用

職業を選択するとき、職業によっては絶対逃げられない義務がある。

銀行員は顧客の預金高を口外してはいけないという「守秘義務」がある。警察官は夜中も働かなければいけない。それと同じように、教師という職業にも色々な義務がある。

その義務とは、自分の教える教科をいかに分かりやすく生徒達に理解させるか工夫をこらすこと、その生徒らしさに寄り添い生徒の個性を伸ばすこと、生徒が直面した問題に自分で解決する力をつけさせること、などだ。

それと同時に、教えるという仕事を成功させるために、自分のコンディションを最高の状態に持っていく必要もある。心に「ゆとり」を持ち、ゆったりとした気持ちで生徒と付き合い、授業をすることも求められるだろう。

各先生が自分の心の中に「もういらない！」ではなく、「まだいまだ！」と前向きな気持ちになるために、彼ら教師が必要としているものは何なのか。余裕のある気持ちで子供の教育にあたれるようになるためには何が必要だろうか。

まずは、じっくり考える時間、本を読む時間、趣味を持つ時間、友人達と語り合う時間、そして仕事以外のことにも目を向け、生きていることを楽しむ豊かな心を取り戻すことが必要だと思う。ゆとりはそこから湧いてくる。

そして先生の中に「ゆとり」が生まれてくれば、教師として何に重きをおき、どこを合理的にした授業をしなければならないかが見えてくるだろう。

◎2002年「新教育指導要領」のもとでの小学校授業時数の変化

カッコ内は削減される授業時数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	272 (34)	280 (35)	235 (45)	235 (45)	180 (30)	175 (35)
社会	-	-	70 (35)	85 (20)	90 (15)	100 (5)
算数	114 (22)	155 (20)	150 (25)	150 (25)	150 (25)	150 (25)
理科	-	-	70 (35)	90 (15)	95 (10)	95 (10)
生活	102	105	-	-	-	-
音楽	68	70	60 (10)	60 (10)	50 (20)	50 (20)
図画工作	68	70	60 (10)	60 (10)	50 (20)	50 (20)
家庭	-	-	-	-	60 (10)	55 (15)
体育	90 (12)	90 (15)	90 (15)	90 (15)	90 (15)	90 (15)
道徳	34	35	35	35	35	35
特別活動	34	35	35	35 (35)	35 (35)	35 (35)
総合学習	-	-	105	105	110	110
合計	782 (68)	840 (70)	910 (70)	945 (70)	945 (70)	945 (70)

「総合的な学習の時間」が、3年生以上で週3時間配当

その結果、生徒達もゆったりとした時間の枠組みわくぐみの中で、ゆったりとした気持ちで「学びの場」を確保できる。気持ちも落ち着き、何にでも取り組んでいけるようになる。

そう、ゆとりとは時間の分量の大小ではなく、心で受けとめるべきものの大きさ。心のサイズは測れない。測れないほど無限大の中のゆとりは、現実のこともじっくりと眺めるながことができる。じっくり考え、じっくり結論がだせる。それをベールに行われるのが「ゆとり教育」なのだ。だから捉え方を間違っではないけない。本当に心の中にゆとりが湧いてくる教育とは何かを考えていこう。

3 ボランティアはするもの、されるもの？

◆受け入れ側に負担をかける奉仕

「皆さん、今日はボランティアの方々が沢山きますから、頑張りましょう！」

「皆さん、今日はよく頑張りました。お疲れ様でした」

これは、ある養老院ようろういんでの朝と夜の食事前の院長の挨拶あいさつだそうだ。それを聞いたとき思わず、「え、何を頑張るの。何を頑張ったの。何がお疲れ様なの」と疑問を感じずにはいられなかった。そして質問した。

「どうして頑張るんですか」

現在、ボランティアが大変流行はやっている。ボランティアを授業の一環いつかんとして取り入れている学校もある。文部科学省も授業の一環として組み込もうとしている。

人のために何かお役に立つことはうれしい。でも、それが卒業単位に必要なので「やらなければいけない！」という強制的なものだったり、ボランティアをしているのが一種の

ステイタスになったりしたら、それは本当にボランティアと言えるのだろうか。

「お・ば・あ・ちゃ・ん！ お・げ・ん・き・で・す・か？」

まるで幼稚園の子供に話かけるかのように区切って発音するボランティア。

「はーい、お・か・げ さ・ま・で！」

その呼びかけに合わせ子供のように答えるお年寄り。ボランティアがいなくなると「はーあ」とため息をついて、今までの鈍い動きは嘘のようにお年寄り達はさっさと歩き出す。

ボランティアに来た子供達は、自分達はいいいことをしていると一生懸命張り切ってお年寄りの面倒をみる。張り切って面倒をみるのはいいけれど、肝心のお年寄りの「心」は汲み取らない。だから、ボランティアを受ける側は実際に「うれしい！」ではなく、「緊張してしまう！」「疲れてしまう！」という本音をもらす。

付き添ってくる先生達も、「怪我をさせないように丁寧にやりなさい」と怪我の注意に気をとられ、お年寄りがどんな表情をしているのか、その表情が表面的なものか、そうでないのかを汲み取らないという。

◆すべての奉仕活動はすなわち善になる？

多くの子供達が小さいときから「あなたのためなんだから」と言われ、何時から「おピ



アノ、何時から「お勉強」と、親の管理するスケジュールに合わせて、時間に追われる余裕のない生活を強^しいられる。

そうした環境の中で育てられた子供にとって、あらゆることの基準は「自分」でしかなくなっていく。他人がどう思っているのか、どう感じているのかを考える思考回路が、まったく言っているいい程、欠^{けつじょ}如^{じょ}していく。だから、自分が「いいことをした」と思えることは、絶対相手も「いいことをした」と思ってくれるものと確信して、疑わない。

今まで、人のために何かをしたことがない子供達。されることはあるが、したことがない子供達。「奉仕活動」を通じて社会と繋^{つな}がったことで「人から頼^{たよ}られている」「喜^{よろこ}んでもらえている」と思い、そこに「やりがい」と「こころよさ」を感じるのかもしれない。しかし、すべての奉仕活動が必ずしも「善^{ぜん}になる」とは限らない。物事そう単純にはいかなことも知るべきなのだが。

子供達の動機付けになっている反面、それが受け入れる側の負担になったり、「自己満足」から出発している面も否^{いな}めない。たとえどんなに心を配っても、自分のことすら解らないことが多いのに、人の心の中を一〇〇%理解し、満足してもらえるようにするのは難しい。

ましてや人の間で生きていけると、無意識にする行動さえもが、自分の「思惑^{おもわく}」とは関係なく人を傷つけたり、人を喜ばせたりと、一人歩きをしてしまう。それだけに、相手に関

係し、意識をしてする行動にはもう少し心を砕いてみたいと思う。

◆袖触り合うも多生の縁

「ボランティア」という言葉には「自発」という意味があり、本来、強制されてする活動ではないはずだが、もしそれを「授業の一環」としてやろうと考えているのなら、なぜそれをするのかの理由からしつかり納得、理解してスタートして欲しいと思う。

そもそもボランティアは、「されるもの」（受け身）でも、「するもの」（強制）でもないはず。人間、すなわち人の間で生かされる者としてこの世に生を受けたら、自分以外の人のためにできることをするのは、当然のことだ。

確かに、「ボランティア」という横文字は日本にはなかったが、昔から日本には「袖触り合うも多生の縁」と言って、人のためにできることがあれば何気なく、誰でもがやっている。たとえ貧乏で、お金や時間を人のために使えない人でも、「子供がこんな時間に外にいちやいけないよ、早く帰りなさい!」「お母さんのお手伝い、えらいね」などと気持ちの面からボランティアをしていた。それも、人として当たり前と、無意識でしていた。親切心の出し惜しみというべきものはなかったように思う。

「ボランティア」は自分以外の外に向けてする「行為」、すなわち「好意」だろう。だか



ら、最も身近なところで言えば、家族の間で「お手伝い」という形でしてもいいはず。ボランティアを外でしかできないと考えたり、赤の他人にするものだと考えるのは間違いではないだろうか。できることからするのがボランティアのはずだから。

段々子供が育ち、金銭的にも、時間的にも、精神的にも余裕ができ、できることの範囲が広がっていった結果、家庭から近所へ、近所から知り合いへ、知り合いからもっと外へ、もっと外から海外へとできる範囲が広がっていき、今言われている「ボランティア」になったのではないだろうか。

◆自分達がやれるところから

そもそも現在の「ボランティア」は、外国の横文字として「輸入」されてきた。

その結果、「ボランティア」が発生、発展する「過程」は考慮こうりよされず、「結果」だけを追い求め、接つぎ木したボランティアになってしまっているように見える。

「奉仕活動」を教育の一環、授業の科目として取り入れている学校は、きっと子供達に人様のお役に立つことを喜べる心を持って欲しいと考えているのだろう。これは決して悪いことではないし、むしろ奨励しょうれいするべき心の在り方あだろう。

しかし、それが受ける側の好意の上だけで成り立っているならば、それはちよつと

ほんまつてんどう
本末転倒である。もし「奉仕活動」を授業の一つとして取り入れるなら、まず子供達に、奉仕活動を受ける側がどんなことをして貰いたいかを考えさせる。本来、そこからしか出
発できない。

つまり相手の気持ちになって物事を考える練習をし、身近なことからそれを実践させ、それから外の「訓練の場」として、学校外に出ていくべきだと思う。

「相手の気持ちになって物を考える」ことの意義を徹底的に教えず、受ける側の好意で成り立っている今のボランティア。受ける側の好意を「無」にするような失礼な「授業」は絶対するべきではないと思う。

「幼児のときから、幼児を一人の人間として扱うべきです」と言っあつかて、「幼児語禁止！」という時代に、「身体が不自由だ」「年をとっている」というだけで、お年寄り達に対して幼稚園の子供に話すような、非礼ひれいなことはさせるべきではない。

義務的にボランティア教育をしなくてもいい。「自分達ができるところから、人のために何気なく何かをさせていただく」。そんな感情が小さい時から、家庭や学校の中で育はぐくまれるように、大人達は小さなことからお手本を見せていきたい。

4 個性豊かな人間って？

◆理想教育とは、個性を伸ばす教育とは

最近の学園には、将来教育者になりたいと考えている大学生や、現在の教育を何とかしたいと、ビジネスマンから教育者に転職を考えている若い方達が訪ねてくれるようになった。

人間大好き、おしゃべり大好きな私は、そんな彼らと時間を忘れて話し込んでしまう。彼らの話には反省させられること、考えさせられることが色々あり、感激かんげきすることしきりである。そんな私を見て、若い先生方が私のために「パンフレスコ」という月一回、月最後の水曜日の夜、皆でおしゃべりをする会を作ってくれた。

「パンフレスコ」には特別なテーマはないが、「パンフレスコ」に参加した方々が雑誌の中で感じた自分の考えをまとめ、メールで送ってくださる。それを読むのがまた楽しい。

学園は個性教育だと思われる。それは、生徒の人数が少ないから個性教育ができる

と考える方が多いからだろう。実際、メールを送ってくださる「パンフレスコ」参加者も、個性教育をするのには、人数の大小が大きく影響えいきやうしていると考えている方が多いようだ。

「個性教育」、確かに響きはいい。しかし、「個性」とは何なのか。「個性教育」をするのには、四〇人という人数のクラスでは無理むりなのだろうか。一クラス七〇名の時代には個性のある子供は育たなかったのか。本当にそうだろうか。

一クラス七〇名でも個性のある子供は育っていた。制服は個性を伸ばさないと反対して、自由にさせている学校の生徒達も、外国の人達から、「日本の女の子達はなぜ、同じような厚底あつぞこの靴くつをはいて、金髪あつぞこにしているんですか。あれは制服ですか」と聞かれるほど、似たような格好をしている。

「自由」とか「平等」とか「個性」という言葉を本当に理解するのは難しい。なぜ難しいのかと言えば、「自由」礼儀れいぎ知らず」「平等」思いやり不足」「個性」自分勝手」などという言葉に簡単に置き換えられても不思議でない状況があるからだ。自由だからといって、混こんでいる電車に大股をひらいて、一人分半の座席を一人占めじしていい訳でもないし、平等だからといって、必要もない物をもらって、もっと必要と思っている人に分け与えることもなく、捨ててしまったり、個性優先といって、明らかにそれは個性ではなく、単なる「わがまま」であつたり、わがままから発した社会性のなさであつたり……。

本当に子供の個性を大切にしたいなら、個性が自分の中から伸びるような基礎力をつけ、あげなければいけない。個性を認める土壌を、子供の周りにいる大人達から育まなければ、始まらないのではないか。「他人様はどうでも、自分の子供はぜひ、いい大学を出て、いい会社にいたいのです」と言っているうちは、「個性」を認める大人の社会は育たないのではないかと思う。

◆個性が輝き出す条件

学園では、「個性とは、自分のしたいことを見つけ、それを「まねぶ」（真似する）うちに自然に滲み出てくるものである」と考えている。まずは素直に学ぶ力、真似ぶ力を養いたい。そして、自分に自信ができ、自分に物事を判断する価値基準ができ、はじめて個人的な生き方もできるようになると信じている。また、個性豊かな人間になるために、礼儀、思いやり、約束を守るなどという、人間として当たり前の心づかいができることも大切だと考えている。

今の世の中何か問題があると、その問題を根本から考えるのではなく、表面的なことばかりをとりあげる。以前、母親に反抗して困っていると相談されにきたお母さんに対し、「自分の家の中に、彼の居場所がないような気がして淋しいんだと思います」とお答えした

とき、そのお母さんが「六畳じようの自分の部屋があるのに信じられません！」と返答された状況とよく似ている。

理想教育や個性教育をするにしても、それをしようとしているのは生きている人間。その教育を受けようとしているのも生きている人間。人間は生き物であり、昨日、今日、明日と続く時間の中で生きている。それだけに、目に見えない変化も含めて、毎日変化するのが当たり前だ。

毎回反省し、何をそのまま続けていくのか、何を変化させていくのかを判断しなければならぬ。そのためにいろんな方の意見に耳を傾け、いろんな方向から検証けんしやうしていきいたいと思う。それだけに、パンフレスコに来てくれる方の意見は、自分を振り返るきっかけになり、大変貴重きちやうだ。

学園では新たに「証券」の授業を設け、実際に予算を与え、投資させ、資産運用について学ぶ授業もスタートさせた。いくら理想教育をしようとも、個性教育をしようとも、社会生活からかけ離れているのでは意味をなさぬ。また、社会から叩たたかれることも大きな勉強だ。

失敗を恐れない子供にしたい。いや、失敗から学んで工夫する人間になってもらいたい。基礎学力があれば、その工夫に応じて個人の個性が輝かがやき出すのではないかと信じている。

5 開かれた学校？

◆議論のピントがずれていませんか？

悲しい事件が多い中、また本当にいやな事件がおきた。

大阪教育大付属池田小学校乱入児童殺傷の事件だ。

子供を自分の命より大切に育ててきた両親や家族。どんなに悲しい思いをしていることだろう。

こうした事件が起きると、何とも形容けいようできない程、時代が悪くなっていく予感がして、漠然ばくぜんと恐怖きょうふを感じている人も多いのではないだろうか。私もその一人である。加害者はいけいの背景が日一日と明らかにされてくると、益々ますます怒りがこみ上げる。しかし、それを誰にぶつけてよいかわからないし、何をしていいかわからずにいた。

新聞を読んでも、テレビを見ても、「開かれた学校の落とし穴」「学校開放の盲点」という言葉だけがひとり歩きしていた。子供を地域と一体で育てるために、学校の垣根をとり

はずした弊害^{へいがい}、学校を一般に開放しようと「学校開放」をかかげる現在の制度が結果として悲劇を招いた^{まね}、という議論だけが白熱^{はくねつ}していた。

そして当の加害者は、「精神病院に通院していたので何をして無罪になる」と知人に話していたともいう。

◆本質を見落としてはいけない

何かが違う。そんな思いがずっとしている。

子供を地域と一体で育てるために、垣根を取り外したり、校門を常時開けておくことが地域に開放したことに直結すると、学校関係者は本気で思っていたのだろうか。

誰でも自由に学校に入れることイコール、開かれた学校と思っていたのだろうか。

精神病で苦しんでいる人達と、「精神病院に通院^{つういん}していたので、何をして無罪になる」と公言^{こうげん}する人間をいっしょにして守ることが、本当に病気で苦しんでいる人を守っていることになるのだろうか。何だか日本中が共通言語で話していないような気がする。何だか表面的な言葉の意味に振り回されている気がする。

学校を開放するイコール、門を開いている状態では当然ない。学校にこんなことをしたいと提案したとき、それを聞いて真剣に一考してくれる人間がいるかどうかが大切であり、

校門開放の有無には関係がないと思う。

「学校の門が常時開いていないから……」「垣根かきねが高くて学校を訪問しにくい」などと感じて学校開放を要求するのは、文字通り外形だけを問題にした議論であって、学校と地域とのコミュニケーション問題の本質ではないはず。たとえ外部からの侵入を厳しく監視する学校であつても、何か提案、意見したくてコンタクトを取ったときに、そうした声に聞く耳を持つ学校関係者がいれば、その学校は「開かれた学校」「一般に開放された学校」という意味で受けとめられていいと思う。

もし、子供達のために何かしたいと感じて学校を訪ねたとき、門で名前を聞かれたり、用件を聞かれて「入りにくい」と感じるのなら、それは応対する方の対応の仕方にまずさがあるのではないだろうか。

精神病院に入院した経歴があるから、何をしても「許してしまう」ということは、精神病を克服し、元気に一般の生活をしている人達に失礼だ。何でも許すという安易な考えが、むしろ元気に一般生活している元患者や、今病氣と闘っている患者さんに対する失礼な「同一視」にあたるのではないだろうか。

今回の事件を通して、もう一度しっかり考えてみたい。私達が表面的な言葉の意味に惑わされて、本質を見落としているのではないのかということ。

不幸に見舞われた子供達の命を無駄にしないためにも、単なる同情や、一時的な感情や、「人道的」などという言葉に酔うことなく、しっかりと考えてみたい。それが亡くなった子供達に、私達ができる最低限のことではないのだろうか。

子供は可愛い。私はたくさんの子供を預かってきたが、どの子も可愛い。人の子供をお預かりしても、可愛くて可愛くて仕方がないのに、自分の子供を亡くされた実際の親御さん達はどんな気持ちかと思うとやり切れない。

だから、本当に皆でできることから考えよう。絶対、人任せにせずに。

6 家庭の教育、学校の教育

◆学校とのトラブル相談の電話のはずが……

「そちらではうちの子のような子供を預かってくれますか？」

手に取った受話器から聞こえてきた第一声がそう切り出した。

「今の学校は何にもしてくれないんですよ。主人も何回も学校に掛け合いに行ったのですが。教育委員会も『学校とよく話し合ってください』と言うだけで、何もしてくれません。早く気がついたから何の問題も起きていませんが、子供も転校したいと言っています。はじめから公立の学校には期待していませんでした」

私は学園の授業がお子さんには難しいこと。小学校・中学校の勉強は基礎学力なので、高校・大学に行くか行かないかに関係なく、日常生活をするのに必要なことなどを話した。私立に行くことも考えているそうだが、私立は公立より厳しく、学校の設立趣旨、校則、方針に沿えるか確かめてみる必要があると付け加えた。

すると、どうして子供が転校したがつているのかの説明もお名前も語られることはなく、受話器が置かれた。

これは本当に先生や学校だけの責任だろうか。先生達の言い分もあるだろう。そういえば現役教師をしている知人が憤慨ふんがいしていた。

「今の父兄って、自分の子供さえよければ他の子供のことは『どうだっていい!』という考えがあつて、自分の子供に不利になると思うと、すぐ教育委員会に訴うったえるし、またそれを教育委員会が取り上げて、大きな問題にするのよ。だから親身しんみな先生でさえもやる気がなくなるの。子供のことを一生懸命考えて、注意したり、指導しても、それを細かくいちいちチックされて、『どうしてうちの子供ばかり?』と逆恨みさかうらされて、その上父兄会ふけいで糾弾きゆうたんされたりして……」

親と先生の間「信頼関係がないのかな?」と考えてしまう。信頼関係なくして、いい結果は出せない。自分達の親はどうしていたのかなと、自分達の小さかったときの先生と親のことを考えた。

かつて自分達の親の時代は、学校に期待するもの、家庭でしなければいけないことの境界線が明確にあった。親が学校に期待したのは、親が手を出せない「勉強」を教えてくれることと、集団生活での「マナー」であつたように思う。しかし、その基礎になる日常生



活のマナーはしっかり家庭でしていたし、家庭でするものと考えていた。その上、自分の子供のことをよく知っていた。だから、自分の子供を過剰評価かじようすることもなく、事実を事実として受け入れていたように思う。

それだけに集団生活の場、学校で見せる家と違う子供の顔に、「先生すみませんね。本当にご迷惑をおかけして。先生、どうぞビシバシ注意して、叱しかって下さい」と言っていた。もちろん、そんなことが言えるのは、先生を先生として心から信頼していたからだろう。先生もそれに答えるように、先生として、先生らしく振る舞ったし、振る舞えた。

◆学校と家庭の境界線

先生に苦情が来たとき、「私達をお願いした先生ですから、大丈夫ですよ！」と言い切れる教育委員会や学校関係者が果たして何人いるだろうか。

先生を育てるのは父兄であり、校長であり、教育委員会。

はじめから「良い先生」として生まれてくる人間は、おそらく皆無かいむだろう。「良い先生になりたい」と思って先生になった一年生先生を、皆で育てていかなければならない。

しかし教師という同じ生業なりわいで生きている先生達に対しても、「それって、違うんじゃないですか?」「どうして教師という職業を選んだんですか?」等と尋ねたくなることも多

い。

ただ、そんな環境で勉強している子供達の中にも、素敵な子供、明るい子供、元気な子供、素直な子供がたくさん育っているのも事実。ということは、今の学校、今の教師、すべてが悪いわけではない、ということだ。

いつの時代でも、どこの世界でも、どの社会でも、あらゆる自分が自分にピッタリすることなどありえない。一〇〇%満足することもあり得ない。それは「学校」も「教育」も同じだ。ただ、限りなく子供にフィットするように、限りなく一〇〇%満足するように、家庭と学校が上手に補い合っていくしかない。

親も学校もその境界線を尊重し、領域を侵害せず、過度の「期待」をしないという鉄則のもとに。

◆二種類の愛情

親は自分の子供が「可愛い」ように、教師も自分の生徒が「可愛い」。しかし、親の「可愛い」と教師の「可愛い」はやはり同質ではない。

なぜなら、血の繋がりのある親子の縁は、紙の上では切れるが現実には切れないし、その関係から逃げられない。しかし、生徒にとっての教師とは、そこから栄養分をもらい、

巢立っていくための通過地点。

事実、「人様にこんなことをして申し訳が立たない！」と言って、自分の子供を殺し自殺した親はいるが、自分の生徒を殺して自殺したという教師は、聞いたことがない。

現在、子供達の間で起きている様々な問題は、この「家庭でする教育」と「学校でする教育」に明確な境界線がなくなったために生じているのだと思う。一般の大人も含めて親や教師が「異質の愛情」を「同質の愛情」と勘違いし、お互いの領域を侵害し、必要以上にお互いに依存し、期待したことで混乱してしまったのではないだろうか。

◆自己責任の定着へ

今の時代ほど、何が正しくて、何が正しくなく、何をなすべきで、何をなさぬべきか、先がまったく読めない時代は存在しなかったのではないか。そう考えるとあらゆることが私達を不安にする。本能的に理解できるのはあらゆることが「多様化」しているということだ。もちろん教育も例外ではない。

これからの時代は、従来の基準では測れないことがたくさん出てくると思うし、事実出てきている。その中で生きていかなければならない私達は、何でも古いものが悪く、何でも認めてくれないことが悪いのではなく、「生きる場所が違う」「求めているものが違う」

という解釈をするべきではないだろうか。

そのために、解釈や判断の元になる情報をたくさん集め、正確に理解し、自分に必要か、必要でないかの見極める力が、「自己責任」という名のもとに要求されるのではないだろうか。

親も含めて、子供達を取り巻く大人達の中に「自己責任」という考えがしつかり定着し、実践できるようになると、どんな環境、どんな状況にあっても、それにあまり影響されずのびのびとした子供らしい子供達が育っていくようになるのではないだろうか。

現在の教育にはいろんな問題があるから、うちの学園のようなフリースクールと呼ばれる教育のセーフティネットとして機能する学校が存在するのは事実だ。しかし健全に動いていることまでも否定するより、いいものはいいいいところはいいと認めて、上手に活用していききたいと思う。その思いこそが、多様化を認め、他者を認め、自分達を認めることになると信じている。その思いこそが、子供の世界も広げていける要因になると信じている。

二児の母から上田先生への手紙 3

子供を取り巻く環境は、誰が悪いとか、何かどこかだけ限定的に責任があるという話ではもう済まなくなっている気がします。子供はこうしている間にも成長していってしまうし、今この瞬間にも、この国のどこかで、大事な子供がつまずいて、立ち上がる術を知らないまま、深く傷ついていく。親も本人も誰かにヘルプと言わなければならないのに、そういう考えすら湧いてこない状況の人達をどういうふうにヘルプしていけばいいのだろうかと思います。私は、もしある家庭が家庭としてつまずいていて、それにいち早く気づいたのが、学校という存在ならば、学校はやはりその家庭を放って置いてはいけないと思います。ただ学校には教育という目的が第一義にあります。

そこで、病院という医療現場に医療相談室とかソーシャルワーカーといった医療の側面に存在する福祉的な部分をサポートする機能をあわせ設けたように、学校にも、スクールカウンセラーだけでなく（これも重要ですが）、スクールソーシャルワーカーのような、子供のメンタルな部分だけでなく、学校と生徒の間、学校と家庭の間、またあるときは、子供と家庭の間を補完するような役割を果たす新たな機能を（これって、まさにフリースクール的な気もしますが）一般の学校にも持たせていかなければ、もう末期的な症状を呈している今の状況は打開できないような気がしています。結局子供を大事と思う気持ちが両者にありながら、家庭と学校で対立する図式は悲しくすらある気がしてなりません。現状の学校という機能の不全と、家庭の機能の不全との間で苦しむ子供達の姿を見ている上田先生は、両者の対立の構図ではない解決の糸口はどこにあると思われますか？

それは、まず自分の足元から実践していくことだと思います。自分の周りから変えることだと思います。そのために自分が変わることを思います。人の気持ちを変えることや、社会を変えるには時間とお金がかかります。でも自分が変わるということは、一銭もかかりません。時間もかかりません。今教育がおかしいと思った人から、自分の信じているものを実践することだと思います。身近なことからされるといいと思います。子供という一度きりの大切な時期、自分の子供だけではなく知り合いの子供も大切にしていける。そんな小さなことが大きな社会的問題の解決の糸口になるはずです。

私の家は大変貧乏でした。両親も共稼ぎで母でも朝の9時から夜の8時まで働いており、休みも年に二回位しかありませんでした。でも我が家にはいつも二人の兄と私の友達が入り込んでいました。両親の口癖は「玄関のドアと冷蔵庫のドアはいつでもフリー」と言い、友達ならどんな友達でも大歓迎してくれました。それは、大学時代も社会人になっても続き、土日などは兄の会社の独身の友人達が泊まりがけで来て、6畳と4畳半の我が家は足の踏み場もないほど、人で溢れていました。この中で、友人達は両親に親のこと、学校のこと、勉強のことを一生懸命相談していました。「上田の家と上田のお袋さん達がいなかったら、今の俺達はない！」と言ってくれる人達が沢山います。両親のしたことは大それたことではありません。でもすごいことをやったと思います。